障害と支援の学びが未来をつくる

植草学園大学 / 植草学園短期大学

特別支援教育研究センター

ニュースレター

vol. 7
2020.2

植草学園大学・植草学園短期大学　特別支援教育研究センター
〒264-0007　千葉市若葉区小倉町 1639 番 3
(代　　表) TEL 043-233-9031　FAX 043-233-9088
(センター) TEL 043-239-2624

インクルーシブな教室を見据えて

植草学園短期大学　教授
特別支援教育研究センター長
堀　彰人

特別支援教育が始まり10年以上経過し、「特別支援教育の推進について（通知）」に示された、「一人一人の教育的ニーズを把握し、（中略）適切な支援及び必要な指導を行う」という表現が当たり前のように聞かれるようになりました。

小中学校の新学習指導要領では、特別支援教育に関する記載も充実したものになりました。総則第４「児童（生徒）の発達の支援」では、特別支援学級や通級による指導の教育課程も明示され、特別な教育的ニーズのある児童（生徒：以下児童等）に対して個別の教育支援計画等を作成し効果的に活用することを求めています。また、各教科の「指導計画の作成と内容の取扱い」では、「障害のある児童等などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと」とし、さらに解説編では、障害カテゴリーではなく、具体的な困難さを挙げ、指導上の意図とそのための手だてが例示されました。全ての教職員が日常の学習指導の中で考慮すべきこととして位置づけられたと言えます。

1　合理的配慮の表明

特別支援学校の新学習指導要領では、自立活動にも改訂があります。「健康の保持」に「障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること」が新たに加えられたことも、その一つです。「自己の障害の特性の理解を深め、自ら生活環境に主体的に働きかけ、より過ごしやすい生活環境を整える力を身につける」ことが求められています。

以前、学習障害のある生徒との相談で、「定期テストで、（自分に合った）配慮があれば、もっと得点が取れる」という話になりました。自己の特性や自分に必要な方略も知っている生徒です。しかし、その生徒は、「怖い……」と配慮を求めることについて迷い続けました。自らの障害特性を理解し、どのように環境を調整すればより過ごしやすくなるか知っていても、主体的に働きかけることへの躊躇がありました。

文部科学省の「文部科学省所管事業分野における障害を理由とする差別の解消の推進に関する対応指針（平成27年）」では、「意思の表明がない場合であっても、当該障害者が社会的障壁の除去を

必要としていることが明白である場合には、法の趣旨に鑑み、当該障害者に対して適切と思われる配慮を提案するために建設的対話を働きかけるなど、自主的な取組に努めることが望ましい」とされています。仮に、こうした働きかけがあったとしても、「異なる」手段等の選択に大きな抵抗を感じる場合もあります。異なる手段等を求めたり、実際に選択したりできるよう、障害のある人が「表明する力」を身につける努力をすればよいのでしょうか。日々過ごす学級が、日常的に目標に向かって多様な手段の選択が可能な場として実感されている必要があるでしょう。

もう一つ必要なことは、学級が表明に耳を傾け、気持ちを理解し、共に考えようとしてくれる集団であると信頼できることです。こうした周囲との関係の中でこそ、自己理解や障害受容が深まっていくのではないでしょうか。

日常の身近なコミュニケーションを通し、学級が「多様な他者」の存在を認めつつ合意形成に向けた対話ができる集団に育つ必要があります。

2　多様な児童生徒の過ごす教室

先の「児童（生徒）の発達の支援」では、よりよい人間関係を育てるための学級経営の充実、個々の多様な実態を踏まえた発達の支援が求められています。特別な配慮を必要とする対象には、障害のある児童等とともに、海外から帰国したり、日本語の習得に困難があったりする児童等、不登校児童等が挙げられ、組織的、計画的な支援が求められています。なお、教育再生実行会議第九次提言（平成28年）では、「多様な個性が生かされる教育」として、こうした児童等の他に、学力差に応じたきめ細かい教育、特に優れた能力やリーダーシップ教育、家庭の経済状況に左右されない教育にも言及されています。

学校での学習や生活には、上述の児童等に限らず、様々な「わからない」や「困った」があります。また、そういう時が誰にもあります。援助や配慮を要請することに躊躇することもあるはずです。その背景には、「間違うこと」や「（周囲とは）異なること」を巡る不安などがあると考えられます。「間違うこと」や「異なること」を「いけないこと」と感じ、援助や配慮への表明が必要と思うことを、不安な感情とともに飲み込んでしまっているかもしれません。

3　日々の対話で教室の風土を育てる

先日参観させていただいた小学校の授業で、ある児童の発言が途中で止まってしまいました。担任の先生は、「Ａさんが考えていたことを、想像して引き継いでもらえないかな」と投げかけました。指名された児童は、時々、「こういうこと？」とＡさんの考えを確認しながら役割を果たし、お互いに笑顔を交わして着席しました。この学級では、児童が誤った回答をした時に、時々、「どうしてそう考えたか、○さんの気持ちになって」クラスで考え合うそうです。「自分もそう思っていた」、「そう考えたくなった気持ちもわかる」や、「（Ａさんのように）考えてみて、改めて（そのポイントの）大切さがわかった」といった感想が出るそうです。

「主体的、対話的で深い学び」は、将来、自分たちの暮らす社会を多様な他者と協働しながら切り拓いていく姿勢につながります。自分と異なる他者の意見、その背景となる考え方を、自分の想定と「異なる」からと切り捨てたり、その考えの持ち主を排除したりするのでなく、そこに至った思考の道筋に耳を傾け、背景を想像し、相互の納得へ向かう対話の過程が重要です。

「わからない」思いや、「異なる」考えを安心して表明できるのは、頭から否定されず、納得に至るまで共に考えを近づけ合える信頼があるからです。「わからない」から「わかった」に変化した経験をもとに、わかるまで聞こうとする姿勢が育ちます。相互にコミュニケーションの舞台から降りず、誠実に対話を続けることが必要です。

友だちの「わからない」の表明が、「わかった！」に変わるためには、単に難易度の低い言葉に言い換える等のスキルだけではなく、説明の過程で、友だちの表情や反応をモニターし、友だちの理解の状況に合わせた表現の調整が求められます。自らの知識や技能をもとに、一方的にではなく、他者の状態・状況に合わせて思考・判断し、表現を調整し、お互いの納得に向けて、他者（の状況）と向き合う体験をしていることに他なりません。

一人一人に、こうしたコミュニケーションのスキルや人間性が育つことで、「わからないこと」、「間違うこと」、そして「異なること」を安心して表現できる集団の風土が育ちます。障害のある人の困難さも理解しようとし、相互に過ごしやすい生活の場を築こうとする共生社会の担い手としてのスキルや人間性、風土につながるものです。そして、障害のある児童等、何らかの困難さを感じ

ている児童等にとっては、身近な周囲の他者と共に、その時々の困難さを解消する過程を過ごし、そのよさを実感した体験の積み重ねが、適切で肯定的な自己理解や自己受容を深め、合理的配慮の表明の基礎ともなるのでしょう。

冒頭で示した通知では、特別支援教育の理念として、「さらに、特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている。」としています。

教育改革の流れの中で、この一文を再認識しながら、多様な児童等が過ごしていることを、全ての教職員が強く意識し、日々の学校教育を進めていく必要があります。

植草学園　特別支援教育研修会

高等学校における特別支援教育

―支援の連続性を目指して―

令和元年12月6日（金）

本研修会も３年目を迎えました。今年度は、講師として千葉市立稲毛高等学校教諭　清水範子先生をお迎えし、高等学校在学中と、その前後の時期との支援の継続を念頭に置いた具体的な実践についてお話を伺いました。研修会には県内外から40名の参加がありました。たくさんの具体例をあげながらのご講演でしたが、清水先生の熱い語り口に、参加者が引き込まれていく様子がよくわかりました。中学から高校の時期が、本人にとって人生を大きく変える大事な時期だと強調されたご講演の後、中学校からの引継ぎの在り方、合理的配慮と評価、個々の実態に即した指導内容の選択など多岐に渡る内容についての質疑応答が終了時刻間際まで活発に続きました。

〈ご講演要旨〉

中学校との引継ぎは、入学が確定した後に丁寧に行っており、その上で、中学校から「変えない」ことと、高校という場を考え「変えていく」ことを整理していく必要がある。また、どの時点から躓いているのか、その背景は何かを理解していくことが大切。生徒が追い込まれてしまわないよう、支援体制を築き、高校での生活や学習を充実し、なるべく早い時期から進路指導にも力を入れていけるとよい。

指導にあたっては、学校生活の具体的なエピソードを生徒と一緒に振り返る。生徒自身の語りから、どう感じ、どう考え、どう判断したのかを丁寧に確認し、次に活かせる方法を相談してきている。生徒自身からも日常、不安に感じていることなどを表現するようになった。解決方法を一緒に考え、実際の場面でその成果が実感できることで、生徒自身の自信につながっていく。また、この過程で関係職員と連携を図ることで、生徒の感じ方、考え方などに対して職員が否定的に捉えることが少なくなった。生徒の視点に立った想定で、どのようにしたら取り組みやすくなるか、事前に相談されることが増えてきた。生徒自身の成功体験、職員からの肯定的な理解の積み重ねから、生徒自身が少しずつ適切な自己理解を深められる。こうした指導が、自分の特徴を踏まえ、自分に適した進路を考えることに役立っている。

講師の清水範子先生

小出進先生記念文庫

前　植草学園大学・短期大学
特別支援教育研究センター
河野 昌永

1　小出進先生

小出進先生は、平成26年３月に植草学園大学長を最後に56年にわたる教員生活に終止符を打たれ、半年後の９月10日に逝去されました。81歳でした。

ご経歴は、以下の通りです。東京都立青鳥養護学校や千葉大学及び同附属養護学校、植草学園大学・短期大学の教員として、また全日本特殊教育研究連盟（全特連。現全日本特別支援教育研究連盟）、文部省（現文部科学省）、厚生省（現厚生労働省）など、障害のある人の教育・福祉・労働等にわたって、全国的に活躍されました。

【小出進先生略年譜】

昭和８年３月18日	新潟県中頸城郡妙高村に生まれる
26年４月	新潟県中頸城郡妙高村立土路小学校助教諭（～27年３月）
30年４月	東京教育大学教育学部特殊教育学科入学（～34年３月）
34年４月	東京都立青鳥養護学校教諭　（９月研究主任）
４月	全日本特殊教育研究連盟事務局・機関誌編集担当
40年４月	千葉大学講師（教育学部）
41年９月	千葉大学助教授（教育学部）
44年９月	文部省教育課程改善調査研究協力者（～46年３月）
49年６月	東京都民生局委託研究「心身障害者福祉作業所の実態と課題」共同研究者代表
50年12月	第２回アジア精神薄弱会議「就労概念の拡大とその場の拡充」を発表
	信州大学教育学部附属養護学校実践研究指導（～58年11月）
51年９月	日本特殊教育学会常任理事・機関誌編集委員（～60年８月）
52年１月	千葉大学教授（教育学部）
２月	日本教育心理学会機関誌常任編集委員（～55年１月）
53年４月	千葉大学教育学部附属養護学校長　（～58年３月）
	文部省学習指導要領編集協力者
54年４月	文部省特殊教育教員資格認定試験専門委員（～57年３月）
55年１月	日本精神薄弱者福祉連盟編「精神薄弱者問題白書」編集長　（～平成17年11月）
57年１月	日本精神薄弱研究協会機関誌編集長（～平成４年６月）
４月	文部省教育職員養成審議会委員（～平成２年11月）
58年５月	文部省大学設置審議会専門委員　（～63年３月）
59年４月	全日本特殊教育研究連盟機関誌編集長（～平成８年３月）
11月	総理府中央心身障害者対策協議会専門委員（～平成６年２月）
60年２月	全日本特殊教育研究連盟副理事長（～平成７年６月）
４月	全日本精神薄弱者育成会理事　（～平成３年３月）
	日本精神薄弱者福祉連盟理事　（～平成17年３月）
昭和60年９月	厚生省中央児童福祉審議会委員（～平成５年９月）
	臨時教育審議会臨時委員
61年１月	日本精神薄弱研究協会副会長　（～平成４年６月）
62年１月	文部省教育課程審議会臨時委員　（～63年12月）
63年	文部省学習指導要領編集協力者
４月	千葉大学教育学部附属養護学校長（～平成５年３月）
平成１年11月	NHK厚生文化事業団「精神薄弱の人たちの就労と社会参加に関する関係者の意識調査」調査研究専門委員会代表　（～３年８月）
２年３月	日本教育心理学会機関誌編集委員　（～４年12月）
４年７月	日本発達障害学会副会長　（～11年12月）
６年８月	NHK厚生文化事業団「知的発達に障害のある人たちの職業と生活に関する調査」調査研究専門委員会代表　（～８年９月）
７年７月	全日本特殊教育研究連盟理事長　（～19年６月）
10年３月	千葉大学定年退官
４月	千葉大学名誉教授
	植草学園短期大学設置準備委員
11年４月	植草学園短期大学教授・福祉学科長
12年１月	日本発達障害学会理事　（～20年12月）
14年４月	植草学園短期大学副学長
15年３月	生活中心教育研究会顧問　（～18年２月）
９月	日本特殊教育学会名誉会員
18年２月	日本生活中心教育研究会顧問
４月	植草学園短期大学学長
19年12月	植草学園大学学長
20年７月	全日本特別支援教育研究連盟顧問
21年８月	日本発達障害学会名誉会員
26年３月	植草学園大学学長退任
26年９月10日	死去　（満81歳）
	正四位に叙せられ、「瑞寶中綬章」を受賞

＊「知的障害教育の本質ー本人主体を支える（小出進　著作選集）」（ジアース教育社）参照

2 「小出進先生記念文庫　目録」(一次資料)

ご遺稿などの資料を植草学園に集めて

小出先生は、学生時代から、書籍やご自身が関わった学校・行政等関係機関の資料を大切に保管され、膨大な数を残されました。特に知的障害教育については、この教育の草創期から関わっておられましたので、歴史的にも価値あるものではないかと思います。

お亡くなりになってから植草学園で整理・保管していくことになりました。研究室等はもとより、小出先生のご自宅からも、段ボール箱に入れて、植草学園に運びました。段ボール箱は、約100個となりました。

本学図書館に「小出進先生記念文庫」が

まず本学図書館の一角を「小出進先生記念文庫」として、先生がお持ちだった障害児教育の書籍を中心に、ご自身が著された著書も含め陳列しました。

ここには、障害児教育の草創期に著された貴重な書籍も並んでいます。詳細は本学図書館のホームページから見ることができます。

「三木安正記念文庫」を参考に目録作成

図書館に収納された書籍以外の、書籍・資料等については、平成26年度に開設された「植草学園大学・短期大学　特別支援教育研究センター」が、資料の整理に当たりました。

目録の作成に当たっては、東京都練馬区大泉にある学校法人旭出学園の「三木安正記念文庫」の目録を参考にさせていただきました。

三木安正先生は、戦後の知的障害教育の生みの親といわれる方で、小出先生の恩師のお一人と伺っています。その三木先生が遺された大量の資料等が、理事長をされていた旭出学園の「三木安正記念文庫」に整備・保管されています。

「小出進先生記念文庫」の収蔵資料を、「全特連」「全日本手をつなぐ育成会」「文部省」「全国の養護学校」など大きく20に分け、例えば、「全特連」であれば、全国大会、地方大会、発達障害セミナーなどと下位項目を立て、分類していくことにしました。目録の項目はできるだけ同じになるよう、題目、著者・制作者、頁数、発行年月日を基本とし整理しました。

【小出進先生記念文庫　目録（一次資料）集計表】

No	項　　目	資料数	詳　　細
1	全特連（全日本特殊教育研究連盟・全日本特別支援教育研究連盟）	533	全国大会、地区大会、発達障害教育セミナー、機関誌（「精神薄弱児研究」「発達の遅れと教育」「特別支援教育研究」）など
2	日本精神薄弱者福祉連盟・日本知的障害福祉連盟	108	日本精神薄弱福祉連盟セミナー、アジア知的障害会議など
3	日本精神薄弱者愛護協会・日本知的障害者福祉協会	18	機関紙「愛護」など
4	日本精神薄弱研究協会・日本発達障害学会	228	日本発達障害学会、「発達障害研究」など
5	「精神薄弱」にかわる用語問題	25	
6	全国精神薄弱者育成会・全日本手をつなぐ育成会	802	全日本精神薄弱者育成会（手をつなぐ親の会）全国大会、（精神薄弱者の）職業と社会参加に関するセミナー、機関誌「手をつなぐ親たち」「手をつなぐ」「東京手をつなぐ親たちなど」
7	文部省（文部科学省）	420	特殊教育課程改善協力者会議、特殊教育研究調査会、教育職員養成審議会、課程認定特別委員会、免許基準専門委員会、学習指導要領、学習指導要領解説など
8	厚生省・労働省等	383	総理府障害者対策推進本部、中央心身障害者対策協議会、厚生省児童家庭局障害福祉課、国際障害者年関係、東京の福祉など
9	学会等	617	日本特殊教育学会（「特殊教育学研究」他）、日本教育心理学会（「教育心理学研究」他）、日本精薄教育研究会（「精薄教育」）など
10	書籍	634	「実践障害児教育」（学習研究社）、「日本の精神薄弱教育戦後30年」（全日本特殊教育研究連盟）、「フロイド第１巻　精神分析入門」（日本教文社）、洋書など
11	NHK厚生文化事業団	26	
12	国立特殊教育総合研究所	67	
13	大学関係	256	東京教育大学、東京学芸大学など
14	全国精神薄弱養護学校長会・全国特殊学級設置学校長協会	39	
15	全国の養護学校等	1,086	北海道、東京、長野、熊本など日本全国47都道府県の養護学校等での研究会、講演信州大附属養護学校での研究会、講演
16	千葉県	773	県内の養護学校、小学校等の研究会、講演
17	日本生活中心教育研究会	72	講演、機関誌「生活中心教育研究」
18	千葉大学	250	教育学部研究紀要、特殊教育長期研修生、内地留学生の研修のまとめなど
19	千葉大学附属養護学校	807	「研究紀要」「実践メモ」、「公開研究会開催要項・支援案」、PTA会報、授業研究会支援案、児童・生徒文集など
20	植草学園大学・植草学園短期大学	822	本学図書館所蔵（783冊）
合　　計		7,966	

段ボール箱を植草学園に運び入れてから４年半。段ボール箱から一つ一つ資料を取り出しては、ひたすらパソコンへの打ち込み作業を行いました。学校要覧などの用紙１枚のものから分厚い書籍まで、いろいろな資料が出てきました。それを記録し、まとめ、一次目録として作成しました。その数約8,000点になりました。（前頁「集計表」参照）

全特連と教育実践

中でも、「全特連」との関係は特筆すべきものです。昭和34年東京都立青鳥養護学校教諭になると同時に、機関紙「精神薄弱児研究」の編集委員となり、その後、編集長、副理事長に。平成13年からは初代理事長三木安正先生、２代理事長山口薫先生の後、３代理事長となりました。理事長退任後は顧問となり、56年間全特連に関わってこられました。この関係の資料が多いのは必然と言えます。

教員生活の後半、小出先生が大切にしてこられたのは、障害児教育現場での教育実践を応援することだったと思います。その数は圧倒的です。分類では、「全国の養護学校等」「千葉県」「千葉大学附属養護学校」などにまとめられています。主に知的障害教育への関わりを大切にされ、全国津々浦々で学校の研究会に招聘され授業を応援し、講演を行いました。

20年以上教育実践に関わった学校が全国で４校あったそうです。これも驚くべきことです。もちろん教育等関係者を対象に、日本全国すべての都道府県での講演も行っています。「今日は山口、明日は山形で」の連日の講演などといった、ハードな日々を送り、道々の移動の車中で、次の会場の講演内容を考え、原稿をお書きになったともお聞きしております。今さらながらそのすごさには驚かされます。

３　「小出進先生記念文庫　全仕事　目録」

必ず原稿やメモを用意して

小出先生は、講演等では必ず丁寧に原稿を書いておられました。千葉大学附属養護学校の校長時代、校長として１、２分の全校朝会のあいさつでも、メモ用紙に書いて子どもたちの前でお話しされていました。各地での講演の原稿や著書の原稿、あいさつ文までもきちんと手書きの文章として整理され残されています。

「小出進先生記念文庫　目録」（一次資料）の項目の分類にできるだけ沿いながら、講演原稿、著作の元原稿・コピー、講演テープなど、小出先生の「全仕事」としてまとめました。（次頁「集計表」参照）

魅力的なことばがちりばめられて

先生は文章の書き方、ことばの使い方にもこだわりをおもちでした。遺された原稿からも読み取れます。

千葉大学附属養護学校の校長時代に、支援案（学習指導案）の書き方について助言を受けたことがあります。「誰が見ても、読んでも分かりやすい文章を書くこと。難しい文章はだめです。読みやすいように、段落は３、４行でかえること。中身が分かるように、見出しもつけること」など。先生ご自身の書かれた全特連の理事長時代の全国大会や地区大会の要項の巻頭言や千葉大附属養護学校の「研究紀要」・「実践メモ」などを資料整理の過程で改めて再読拝見して、この姿勢は貫かれていると感じました。

小出先生は、学生時代から“書く”ことがお好きだったようです。学生時代、クラスの同人誌に投稿された「ニヒルな影法師」という作品も残っています。作家になりたかったとも漏れ聞いております。

ことばを巧みに操る才能にもあふれていらっしゃるようで、それが、「小出語録」からも分かります。「自立的生活は、主体的生活を実現し、させられる生活を、する生活に変える。」「できない子どもではない。できない状況におかれがちな子どもである。」「教育において最も大切なもの、それは方法や技術ではない。子どもと共感する感性である。」「障害にではない。発達にではない。人間に対応したい。」など。日常の会話でもユーモアやウィットに富んでいました。端的に皮肉のようにお話されるのも魅力的でした。

小出先生の教育観・教師観・子ども観など

「小出進先生記念文庫」では、先生が各地で講演され、記録された142本のカセットテープ、VHS、DVD、CDなども所蔵しています。その中の、録音状態の良い講演をホームページにアップしました。（次頁「講演記録」参照）

講演テープには、先生の障害観、子供観、教師観、授業観などが、語られています。そこにはどの時代にも通じる真理があるように思います。今

でこそ、パソコンによるプレゼンテーションが主流ですが、録音された先生のご講演はお話だけです。メリハリのある明瞭な語り口、聴衆を引き付ける力強い魅力を十二分に感じていただけるものと思います。

【小出進先生記念文庫　全仕事　目録　集計表】

No	項　　目	資料数	詳　　細
1	全特連（全日本特殊教育研究連盟・全日本特別支援教育研究連盟）	431	全国大会（理事長として、分科会助言）、地区大会（あいさつ、講演文）、発達障害教育セミナー講演文、機関誌（「精神薄弱児研究」「発達の遅れと教育」「特別支援教育研究」）執筆文など
2	日本精神薄弱者福祉連盟・日本知的障害福祉連盟	29	
3	日本発達障害学会（日本精神薄弱研究協会）、日本精神薄弱者愛護協会	29	
4	「精神薄弱」にかわる用語問題	12	
5	全国精神薄弱者育成会・全日本手をつなぐ育成会	137	全国大会での原稿、（精神薄弱者の）職業と社会参加に関するセミナーでの司会原稿、機関紙「手をつなぐ親たち」「東京手をつなぐ親たち」執筆文など
6	文部省（文部科学省）	61	
7	厚生省、東京都民生局委託研究、社会福祉法人山鳥の会、福祉新聞等	19	
8	学会 等	42	
9	書籍	17	
10	「実践障害児教育」（学習研究社）	61	
11	NHK厚生文化事業団　講演	14	
12	全国精神薄弱養護学校長会・全国特殊学級設置学校長協会	10	
13	全国の養護学校等	241	全国各地の学校で開催された研究会、講演会の講演文
14	千葉県	124	県内の養護学校等の研究会、講演会での講演文、「千葉特殊教育」「研究紀要」の執筆文
15	日本生活中心教育研究会	35	本研究会での講演文
16	千葉大学	11	
17	千葉大学附属養護学校	233	公開研究会（あいさつ、講演、提言等）、授業研究会　指導・助言、「研究紀要」、「実践メモ」など
18	植草学園大学・植草学園短期大学	85	
19	本学図書館　小出進記念文所蔵書籍の小出先生執筆文書	88	
20	その他	90	
合　　計		1,769	

【講演記録　（ホームページ掲載一例）】

No	演　　題	詳　　細	年　月　日
1	講演「教師として努めたいこと　―子どもといかに生活するかの課題追究―」	千葉県立八千代養護学校公開研究会	昭和59年12月８日
2	講演「授業観を変えて」	千葉県立八千代養護学校公開研究会	昭和62年２月６日
3	講演「教育課程編成を学校生活づくりととらえて」	千葉県立市原養護学校・千葉県教委指定教育課程研究　中間報告会	昭和63年11月２日
4	講演「私の生活教育論と教育」	全特連発達障害教育セミナー（阿蘇）	平成２年８月21日
5	講演「生活のための、生活のよる、生活の教育～子ども主体の生活を大切にして」	千葉大学教育学部附属養護学校公開研究会	平成６年３月１日
6	講演「自立的生活を支える」	熊本県立荒尾養護学校公開研究会	平成７年２月10日
7	講演「共感し合い、支え合う子どもと教師」	全特連発達障害教育セミナー（鳥取会場）	平成９年８月25日
8	講演「生活者としての子ども、支援者としての教師」	全特連発達障害教育セミナー（鳥取会場）	平成10年８月24日
9	講演「説明しがたい思いへの理解と共感」	千葉県立八千代養護学校公開研究会	平成11年２月３日
10	講演「戦後50年の回顧－原点への回帰」	全特連発達障害教育セミナー（佐賀会場）	平成12年８月23日
11	講演「今を、明日を豊かに生きる」	全特連発達障害教育セミナー（熊本会場）	平成13年８月20日

4　最後に

中坪晃一先生（前植草学園短期大学長）と木下勝世先生（植草学園大学名誉教授・前本センターインクルーシブ保育コーディネーター）、木内洋子先生（前本センター通常学級ユニバーサルデザインコーディネーター）と共に作業を進めてきました。そして、昨年3月に「小出進先生記念文庫　目録（一次資料）」「小出進先生記念文庫　全仕事　目録」が完成しました。今後はさらに詳細にわたるデータ整理が進められ、整備されることを願っています。

小出進先生記念文庫に関する資料は、本学図書館と学園の一室に収められています。「目録」「全仕事」及び講演テープにつきましては、「植草学園」のホームページから入り、「特別支援教育研究センター」、そして「特別支援教育データ・ベース」にアクセスしていただくとご覧になれます。

「小出進先生記念文庫」の障害児教育の資料取集は、全国でも数少ない貴重なものと聞いています。障害児教育、特に知的障害教育は、独特の教育があるとされています。三木安正先生、杉田裕先生（元東京教育大学助教授）からはじまる生活教育を、小出先生が継承し、生活中心教育として高めました。この教育の源流をたどるとともに、本質を感じ取っていただき、学校現場等で生かしていただけると幸いに存じます。

センター情報　小出進先生記念文庫

故 小出進先生（元大学学長）の「障害のある人たちの本人主体を支える」講演等が聴けます

以下の順で クリック

植草学園大学／植草学園短期大学のホームページ ▶ 「教育・研究活動」 ▶ 「特別支援教育研究センター」 ▶ 「特別支援教育情報データ・ベース（外部ページに移動します）」

▼

「小出進記念文庫」の「36 項目の登録」 ◀ 「小出進先生　講演記録･書籍等掲載文（33 ファイル）」 ◀ 「聞きたい講演名」 ◀ 「文書ファイル」の数字「1989……」

音声が出てくるまでちょっと時間がかかりますが、障害児・者の生活の充実・発展に一生を捧げた故小出進先生の「障害観」、「教育観」、「子ども観」、「教師観」、「授業観」などが聴けます。

公開講座　植草学園大学 × 短期大学

～ 出会い　学びあい　支えあい ～

本学では、～出会い　学びあい　支えあい～をテーマに教育・保育・保健医療等さまざまな分野の講座を皆様にご用意しております。

令和二年度の講座情報は４月中旬以降オープンいたしますのでぜひホームページをご覧の上ご参加ください!!

講座例：自閉スペクトラム症とコミュニケーション支援
　　落ち着きがない子への働きかけ ／ 障害のある子どもへの ICT 活用